

第33回 平日の午後のコンサート

2024.5.15(水) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Wed. May 15, 2024, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

第21回 渋谷の午後のコンサート

2024.5.19(日) 14:00開演 Bunkamura オーチャードホール
Sun. May 19, 2024, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall



〈クラシック・ジュークボックス〉 (Classical Jukebox)

指揮とお話 栗田博文 Hirofumi Kurita, conductor & speaker

ピアノ 壺阪健登** Kento Tsubosaka, piano

トロンボーン 辻 姫子(東京フィルトロンボーン首席奏者)* Himeko Tsuji, trombone (Tokyo Phil Principal)

コンサートマスター 依田 真宣 Masanobu Yoda, concertmaster

アンダーソン：クラシカル・ジュークボックス(約3分)

Anderson: Classical Jukebox (ca. 3 min)

J. ウィリアムズ：映画『11人のカウボーイ』序曲(約10分)

John Williams: Overture to "The Cowboys" (ca. 10 min)

ディロレンツォ：トロンボーン協奏曲『リトル・カウボーイ』* (約12分)

DiLorenzo: Concerto for Trombone and Orchestra "Little Buckaroo" (ca. 12 min)

— 休憩 intermission —

アンダーソン：フィドル・ファドル、クラリネット・キャンディ、
トランペット吹きの子守唄、サンドペーパー・バレエ (約15分)

Anderson: Fiddle Faddle, Clarinet Candy, A Trumpeter's Lullaby, Sandpaper Ballet (ca. 15 min)

ガーシュウィン：ラプソディー・イン・ブルー** (約18分)

Gershwin: Rhapsody in Blue (ca. 18 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council
協力：Bunkamura (5/19) / In Association with Bunkamura (May 19)

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール

指揮とお話 **栗田博文**

Hirofumi Kurita, conductor & speaker

1988年、第23回東京国際音楽コンクール指揮部門において第1位優勝を果たし、翌年、国内主要オーケストラを指揮デビュー。1989年に渡欧。同年、イタリアにおいて第1回アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールに入賞し国際的な評価を確立。1995年、フィンランド・ヘルシンキにおいて開催された第1回シベリウス国際指揮者コンクールの最高位に輝く。同年、フィンランド放

送交響楽団より招かれ、ヨーロッパデビューを果たし大好評を博す。以後、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団等に客演し、キャリアを積んでいる。国内外の活発な指揮活動とともに、国立音楽大学客員教授を務め、後進の指導にも力を注いでいる。クラシック音楽の古典から現代作品まで、幅広いレパートリーを持つほか、様々なジャンルとのコラボレーションも積極的に行っている。今後の活躍がさらに注目されている指揮者である。

東京フィルとは「ハートフルコンサート」「午後のコンサート」のほか映画音楽コンサートなど多彩なコンサートで数多く共演し、幅広い世代から愛されている。

公式ウェブサイト <http://hirofumi-kurita.com/>



ピアノ 壺阪健登

Kento Tsubosaka, piano

ピアニスト、作曲家。神奈川県横浜市出身。ジャズ・ピアノを板橋文夫、大西順子、作曲をヴァディム・ネセロフスキー、テレンス・ブランチャードに師事。慶應義塾大学を卒業後に渡米。2017年、オーディションを経て、ダニーロ・ベレスが音楽監督を務める音楽家育成コースのBerklee Global Jazz Instituteに選抜される。これまでにパキート・デリベラ、ミゲル・セノン、ジョン・パティトゥッチ、キャサリン・ラッセルらと共演。2019年にバークリー音楽院を首席で卒業。2022年、石川紅奈とユニット「soraya」を結成、同年4月1stシングルをリリース。その後全楽曲の作曲、サウンド・プロデュースを手掛ける。



©Sakiko Nomura

2023年7月にはソロ・ピアノでスペインのサン・セバスティアン国際ジャズフェスティバルに出演。11月には銀座ヤマハホールにてピアノ・リサイタルを催行する。2022年より世界的ジャズ・ピアニスト小曽根真が主宰する若手アーティスト育成プロジェクト、From Ozone till Dawnに参加。小曽根真とも共演を重ね、ジャンルを超えた多彩な才能で、次世代を担う逸材と注目を集めている。東京フィルの「午後のコンサート」には初登場。

トロンボーン 辻 姫子

Himeko Tsuji, trombone

京都市立芸術大学音楽学部管打楽専攻を首席で卒業。同大学大学院修士課程修了。現在東京フィルハーモニー交響楽団トロンボーン首席奏者。関西トロンボーン協会理事。玉川大学非常勤講師。これまでにトロンボーンを小西智、神谷敏、呉信一、岡本哲の各氏に師事。第15回松方ホール音楽賞受賞、第10回東京音楽コンクール金管部門第2位(1位なし)他受賞多数。ソリストとして、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、読売日本交響楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団と共演。



プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

アメリカを感じる「クラシック・ジュークボックス」

ジュークボックスと聞いて、懐かしさを感じる方も多いのではないのでしょうか。今ではほとんど見かけなくなりましたが、かつてはお店の片隅にジュークボックスが置いてあったもの。コインを入れて好きな曲を流すことができました。実物を見たことがなくとも、古いアメリカ映画のワンシーンなどできつと目にしているはず。まだインターネットもCDもない時代に、オンデマンドで音楽を再生できたのですから、今にして思えば先進的なアイデアだったといえるかもしれません。ジュークボックスは音楽の流行を映す鏡でもありました。

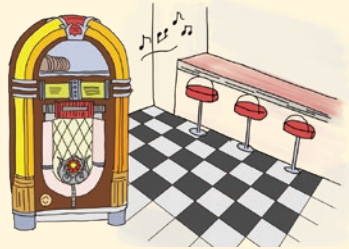
本日は「クラシック・ジュークボックス」と題して、アメリカが生んだ肩の凝らない名曲をお届けします。ルロイ・アンダーソンのその名も「クラシカル・ジュークボックス」を筆頭に、次々と軽快なメロディが流れてきます。西部劇やジャズなど、アメリカらしさを感じさせる音楽をたっぷりとお楽しみください。



マエストロ栗田博文のタクトで古き良きアメリカを感じさせる音楽をお楽しみください

©Takafumi Ueno

遊び心満載の粋なアメリカ軽音楽



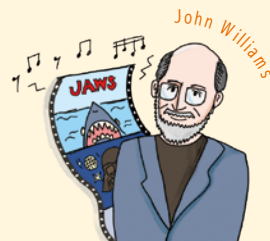
1949年、アメリカの人気女性シンガー、テレサ・ブリュワーが発表した「ミュージック! ミュージック! ミュージック!」は爆発的なヒットを記録しました。どこのお店に入っても、ジュークボックスから聞こえてくるのは、陽気な「ミュージック! ミュージック! ミュージック!」ばかり。そこで、**ルロイ・アンダーソン** (1908-1975) はそのパロディとして、遊び心満載の「**クラシカル・ジュークボックス**」を作曲しました。原曲のリズムに重ねて、ワーグナーの『タンホイザー』大行進曲、ドリーブのバレエ音楽風のワルツ、リストのハンガリー狂詩曲第2番が登場します。「ミュージック! ミュージック! ミュージック!」にもハンガリー狂詩曲第2番が引用されていたので、作曲者はこのアイデアを思いついたのでしょう。



中盤で「曲が前に進まずに同じところをなんどもループする」場面が出てきます。これはアナログ・レコードの「針飛び」を模したものです。レコードの溝にゴミや傷が付いていると、レコード針がずれて、こういう現象がよく起きました。わざわざ生演奏でまねをさせるところに、ルロイ・アンダーソン一流のユーモアが感じられます。

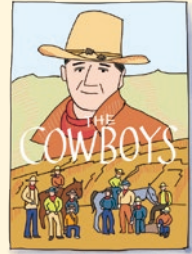
アメリカの大地を感じさせる西部劇音楽

ジョン・ウィリアムズ (1932-) といえば映画音楽の巨匠。『スター・ウォーズ』や『インディ・ジョーンズ』『ハリー・ポッター』など、数々の名曲がスクリーンを彩ってきました。ジョン・ウィリアムズの名を一躍世に知らしめたのは、1975年のアカデミー作曲賞を



受賞したスピルバーグ監督の『ジョーズ』でした。

しかし、それ以前にもジョン・ウィリアムズは多くの映画音楽を作曲しています。そのひとつが1971年の『11人のカウボーイ』。監督はマーク・ライデル、主演はジョン・ウェインで、老カウボーイと少年たちの物語が描かれる西部劇です。



活気にあふれた序曲が、アメリカ西部の雄大な光景を連想させます。後の『スター・ウォーズ』をほうふつとさせるところも。

この曲は吹奏楽編曲でも親しまれています。かつて演奏したことがあるという方もいらっしゃるかもしれません。

西部劇の世界を疾駆するトロンボーンの妙技

続いても西部劇のムードが感じられる作品です。アンソニー・ディロレンツォ(1967-)はアメリカの作曲家、トランペット奏者。カーティス音楽院に学び、ユタ交響楽団の首席トランペット奏者を務めた経験を持ちます。映画音楽やテレビなど放送音楽の分野で活躍すると同時に、金管楽器のための作品を中心に数多くのオリジナル曲を発表して人気を呼んでいます。



トロンボーン協奏曲『リトル・カウボーイ』は1992年、ハリウッド映画の西部劇の音楽を集めた演奏会のために作曲されました。作曲者は「ワインを料理に合わせるように」、西部劇の精神とエネルギーをトロンボーンの名人芸に託したと語っています。

予感に満ちたゆったりとした序奏が連想させるのは広大な荒野。カウボーイの少年の冒険が始まります。意気揚々とした曲調に変わると、ソリストの妙技がくりひろげられます。



軽快でユーモア溢れるルロイ・アンダーソンの世界

アメリカ軽音楽の世界で最大の成功を収めた作曲家は**ルロイ・アンダーソン**でしょう。次々とヒット曲を世に送り出し、その多くはポップス・オーケストラのためのレパートリーに定着しました。軽快で親しみやすい曲想に加えて、ユーモアの要素がふんだんに盛り込まれているところがアンダーソンの魅力でしょう。

「**フィドル・ファドル**」とは英語で「つまらないもの」といった意。同時に「フィドル」とはヴァイオリンの別名で、言葉遊びのようなタイトルが付けられています。せわしくコミカルな調子が続き、いつまでも曲が終わらなさそうなムードがあります。



「**クラリネット・キャンディ**」では、クラリネットが大活躍。作曲者はクラリネットの万能性と、高音域と低音域での音色のちがいに着目して、この楽器ならではの曲を作ろうと考えました。

「**トランペット吹きの子守唄**」はコンサートの舞台裏のなにげない会話から誕生しました。あるトランペット奏者が、アンダーソンに、これまでにないトランペット曲を書いてみないかと声をかけたのです。トランペットといえば、勇ましい曲ばかり。でもやさしい曲があってもいいのでは？そして誕生したのが「トランペット吹きの子守唄」です。独奏は東京フィルトランペット首席奏者、野田亮がつとめます。

「**サンドペーパー・バレエ**」ではサンドペーパー（紙やすり）が楽器として用いられます。意外な道具を楽器として使うのはアンダーソンの得意技。リズミカルなサンドペーパーの摩擦音で、昔のソフトシューダンス（タップダンスのようなダンス）を模倣しています。



ジャズテイストを盛り込んだアメリカ音楽の傑作

アメリカの作曲家 **ジョージ・ガーシュウィン** (1898-1937) は、まずポピュラーソングの作曲家として世に知られました。最初の大ヒット作はアル・ジョルソンが歌った「スワニー」。ガーシュウィンは一躍人気作曲家の仲間入りを果たし、多忙な日々を過ごしていました。



1924年、ガーシュウィンが兄アイラとピリヤードに興じていたところ、新聞記事で「アメリカ音楽の実験」と題されたコンサートが開かれることを知ります。記事によれば「ガーシュウィンがジャズ風の協奏曲を作曲している」。寝耳に水だったガーシュウィンは、あわてて公演の企画者であるポール・ホワイトマンに電話をかけました。コンサートまではすでに一月もありません。ホワイトマンに説得され、ガーシュウィンはすぐさま新作にとりかかります。

当初「アメリカン・ラプソディー」と題されていた作品は、アイラの案で「**ラプソディー・イン・ブルー**」と改題されます。「アメリカ音楽の実験」の公演では、多数の作曲家たちの曲が演奏されました。ガーシュウィンの曲は全23曲中の22番目。長時間の公演に退屈していた聴衆たちは、その鮮烈な曲想に目を覚ましたことでしょう。初演時の編成はジャズ・バンド向けでしたが、後にグローフェが通常のオーケストラ向けに編曲して、クラシック音楽のレパートリーに定着することになりました。

ジャズのスタイルにもとづく即興的なピアノ・ソロを交えながら、華麗な楽想が次々と湧きあがってきます。

いいお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。